

アルフォンス・ミュシャ展を見て

(大分合同新聞文化面掲載)

江藤 明
(元別府大学教授)

19世紀末のヨーロッパに展開したアール・ヌーボーの代表的な作家、アルフォンス・ミュシャの大回顧展が大分県立芸術会館で開催されている。暖冬のおだやかな休日、絶え間なく訪れる観覧者で埋め尽くされた会場は、華やかな芳香に包まれた雰囲気と、高揚した熱気に満ちあふれていた。

「夢見るような横顔の清純さ、風にそよぐ流れるような髪、きらめく宝石、姿勢の美しさを際立たせる衣装の襞」ミュシャの特徴を語るこれらの優雅な光彩に、人びとは時代や民族を超えてストレートに溶け込み、アール・ヌーボーの世界を共有するのであろう。

劇的な生涯をたどるミュシャの足跡を追って、各展示室は「初期修業時代」「パリ時代」「アメリカ滞在」そしてチェコスロバキアの「祖国に戻って」と区分され展示されている。初期修業時代の挿絵から、晩年の油彩画に至るまで、どの作品にもミュシャの豊富な想像力と装飾性、繊細着実な表現力に接することができるが、時代順にいくつかの作品について感想の一端を記してみたい。

「ジスモンダ」＝世紀末のパリを象徴する大女優サラ・ベルナールとの運命的な出会いとなるポスター作品。ビザンチン風な衣装を身につけ、演劇そのままに描かれたこのポスターは、放浪の貧しい青年が一躍脚光を浴びた出世作である。主役の人物を印象強く中央に描き、上下に帯状の文字を配置した形式は、以後くり返し用いられている。

「トラピスティーヌ酒」＝同形の下絵素描が並列されている。簡潔な輪郭線で描かれた人物が平板にならず、上質の品格を保つ秘密が示されている。後年、数多く描かれたリトグラフの人物も、背景となる複雑な装飾図形と同質化した二次元的表現でありながら、息づく輪郭線によって清新さを失わないのは、この鋭敏な素描力によるものであろう。

「黄道十二宮」＝ビザンチン様式やアラベスク模様、豪華な衣装や派手な宝石など、エキゾチックな印象を顕著に表出しているカラーリトグラフの中で、この作品は傑出して美しい。円形の十二星座を中心に、気品に満ちて登場する秀麗な横顔には、誰もが心奪われるに違いない。

「連作・四つの流れ」＝甘美、頹廃、夢、憂愁。ミュシャスタイルの中でも、淡い色調で統一された清らかなエロチシズムの漂う連作である。薫るような肌、優美な曲線をもつシルクの姿に世紀末へのノスタルジアが去来する。

「ラ・ナチュール」＝黄道十二宮の頭部を思わせるブロンズの胸像。流れる髪の大胆な構成が不思議な神秘性を高め、どこか宗教的な瞑想を連想させるものがある。

「スラヴィア」＝アメリカ滞在中は極力装飾的な仕事から離れ、スラヴ民族をたたえる作品を構想しつつ、「百合の中の聖母」など一連の油彩による大作に取り組んでいるが、「スラヴィア」には本来の卓越した装飾性が発揮され、女性美と装飾美の一体化した世界が生み出されている。

「リブシェ」＝祖国の民族衣装をまとったドラマチックな主題。淡い色調で典雅な空間を保つ画面である。1920年前後の「目を閉じた少女」「チェコの心」などと共に祖国を誇る芸術性の高い作品であり、画家としてのミュシャの執念を推測することができる。

没後50年を記念して展覧された日本でのミュシャ展は、チェコスロバキアの協力を得て、1989年4月の東京展を皮切りに21会場、3年間に及ぶ長期開催となっているが、本年3月北海道立帯広美術館で終了することになる。激動する20世紀末、日本各地に多大の感動を残したアール・ヌーボーの華、「アルフォンス・ミュシャ展」、この機会にぜひご鑑賞をおすすめしたい。(’92.1.30)



「黄道十二宮」